

## 両側先天性欠損第二小臼歯に矯正治療後インプラントを用いて交合再構成した一例

○井上 秀人

井上秀人歯科医院

### 【目的】

小児歯科において先天欠損歯の症例に遭遇する機会は多い。

先天欠損が将来の口腔内状況に及ぼす影響や治療法、治療を行う適切な時期などを両親にも説明していく必要がある。

2011年日本小児歯科学会の調査報告により、12都道府県での小児歯科外来患者の集計において10.9%の小児患者に一本以上の先天性欠損歯があり、欠損部位や欠損数により治療法は様々で、適切な時期に問題解決を行う必要があると報告されている。

今回は、下顎両側小臼歯部の欠損症例に対し矯正治療をからめたインプラント応用症例を経験したので報告する。

### 【症例】

患者：YY 男性（1987年11月26日生）

初診：2001.11.13

主訴：矯正治療

現象：他院で両側第二乳臼歯を抜歯したが後続永久歯が先天欠損しており、審美的および機能的回復を希望して来院した。

家族歴：NP 既往歴：NP

診療経過：下顎両第二小臼歯の埋入スペースを得る為に、2012.2～2012.5に

multi-bracket 矯正法を施す。結果的に両側第二小臼歯の欠損部に各約70～75mmのスペースを得たため、スペースリネーナーの装着。その後pt21歳にて、両側第二小臼歯の欠損部に二本の長径13mm、直径4.3mm Nobel Biocare社製 Replace Select Straight Tiu インプラント体を埋入。右側は一次手術時、頬側骨に骨造成を行い、6月の免荷期間において、二次手術を行った。左側は、骨幅もあり初期固定も良好だったので、埋入時にアバットメントを装着した。2009年9月（埋入から一年後）最終的に顎位の事を考慮して上部構造を装着する。8年のfollow upでインプラント体の周囲歯槽骨と歯頸部歯肉の安定性を認める。

### 【考察】

先天性欠損歯が発見した際には、早期的に矯正の手段を用いて十分な歯牙本来の空間を確保し、顎骨の発育が成熟するまでにspace retainerを使用しつつける必要がある。また、先天欠損がある場合、歯牙の傾斜による交合高径の問題や正中のずれなど、顎位の乱れも存在する。本症例においても、術前では下顎が右に偏位していたが、最終補綴を施すたびに下顎位を中心に戻して仕上げる事で、顎位の安定を得ている。